【全国納税貯蓄組合連合会優秀賞】
「『三十円です』の言葉の続き」

富山市立堀川中学校三年　若林　由夏

私は小さい頃から肌が弱い。先日、父も母も仕事で付き添いできない日に、母から保険証と診察券、それと現金二千円を預かって、初めて一人で病院に行った。いつもの病院には、迷うことなく到着。無事診察を終えて、薬の説明を受け、支払いの準備をしていると窓口の方が言われた。

「今日のお支払いは三十円です。」

「三十円？。」私が驚くと、窓口の方は「容器代です。」と教えてくれた。私はとっさに、「わかりました。」と答えて、千円札は使わずに、財布から十円玉を三枚出した。その帰り道、私の頭の中は分からないことで一杯になった。「どうしてこんなに安いの？」「薬のお金は？」「先生の診察代は？。」

母が帰宅し、さっそく質問すると、母は、「保険証」と「こども医療費受給資格証」を見ながら説明してくれた。母によると、今日の病院代のうち、七割はこの保険証で、残りの三割はこの受給者証で負担してくれている。預けた二千円は念のためで、私が生まれてからずっと容器代だけ。そして、これらの制度はみんなが負担した「税金」で支えられていると。

税金といえば、私が知っているのは百円均一の店なのに、必ず用意しないといけないあの「十円」。できれば払いたくない「あのお金」のことだ。

そこで、計算してみた。私は小さい頃から病院通いをしている。ほとんど毎月なので百回以上。一回当たり五千円とすると五十万円。でも、窓口で払うのは容器代だけ。ところで私が今まで払ってきた税金はいくらだろう。百均で五十万円の税金を払うとしたら、五万個の商品。絶対に足りない。

私は、「自分の病院代をどこかの誰かが負担してくれていた」ということに気づいた途端、税金を「できれば払いたくない。」と思っていたのが恥ずかしくなった。

もし税金の仕組みがなかったらどうだろう。私は今のように病院に行けるだろうか。毎日元気に学校に通えただろうか。私だけじゃない。世の中には、もっと大きな病気に苦しんだり、お金がなくて手当ができない人もいるだろう。そんな時、お金のことを気にせず、誰でも安心して治療に専念できるように作られたのがこの制度。そして、それを支えているのが、たくさんの人が負担した税金だ。

「お支払いは三十円です。」この続きには、税金を通した、知らない誰かの温かい言葉がある。それはきっと、「病院代は私達が払いますから、安心してください。」そして、「大人になったら、元気な体で、今度は皆さんが困っている人を支えてくださいね。」と。

私は今まで税金について深く考えたことがなかった。税金は「お互いさま」の支え合い。今回、私は税金の大切さと温かさを知った。私も将来、税金を通して、知らない誰かを支えられる、そんな大人になりたいと思った。